

(様式1)

令和4年7月9日

宮津市議会議長 徳本 良孝 様

会派名	無会派
代表者名	北 仲 篤

### 政務活動費 調査研究(視察)報告書

- 1 視察年月日 令和4年6月7日(火)～6月8日(水)
- 2 視察先・項目 ① 関西学院中等部(兵庫県西宮市)  
・中学生を対象とする農山漁村体験学習について
- 3 参加者氏名 北 仲 篤 以上1名
- 4 経 費 14,440円(14,440円/1人あたり)
- 5 添付資料 視察研修行程表・資料(別添のとおり)

## 政務活動費 調査研究(視察)報告書

6月7日(火) 関西学院中等部〔(兵庫県西宮市(面積:99.96km<sup>2</sup>、人口:48万人)〕

視察項目 ・中学生を対象とする農山漁村体験学習について

### 1 視察目的・内容

#### [目的]

関西学院中等部では第2学年または第3学年時に修学旅行が実施されています。

新学習指導要領においても、教育活動において「主体的・対話的で深い学びを实践することが定められており、とくに特別活動では「体験的な活動」を通して実践が重視されています。6月議会一般質問の答弁で触れられたように「農漁村民泊受け入れ先の確保」「体験プログラムの創作・担い手の確保」が課題となります。その研究のため、先進的な教育に取り組まれている関西学院中等部に視察研修するものです。

#### [内容]

関西学院中等部・高等部では全人格教育を重視される教育方針が重視されてきたとのことです。野外でのキャンプがカリキュラムの一つとして行われてきました。野外活動をするための孤島を所有されており、全員でキャンプをされてこられていたとのことです。それに加えて新型コロナの影響もあり、修学旅行は農村漁村体験学習を行われることになったそうです。その候補地の条件は、①200人を一度に受け入れられること、②地元の体験プログラムと民泊体験ができることであり、これらを満たされる候補として松浦市に決まったそうです。

「一般社団法人まつうら党交流公社」は、長崎県松浦市で広域エリア内14団体の受入組織からなる行政がバックアップする官民協働の組織です。体験プログラムについては、約80種の体験プログラムと約800名のインストラクター、約300戸の民泊家庭を養成しています。「松浦党の里ほんなもん体験」の事業は地域振興を目的にスタートしましたが、体験や民泊を通して、行政関係だけでなく、地元の関係者、教育関係者、何より子ども自身が「見ず知らずの人とでも自分の力で信頼関係を築くことができること」を確信されました。そのことから手紙や電話で積極的に働きかけることが明確となりました。まさに「生きる力」や「人格」が高まる場の提供をできると考えられます。

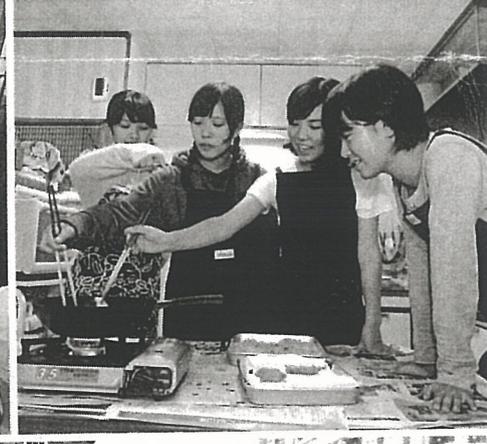
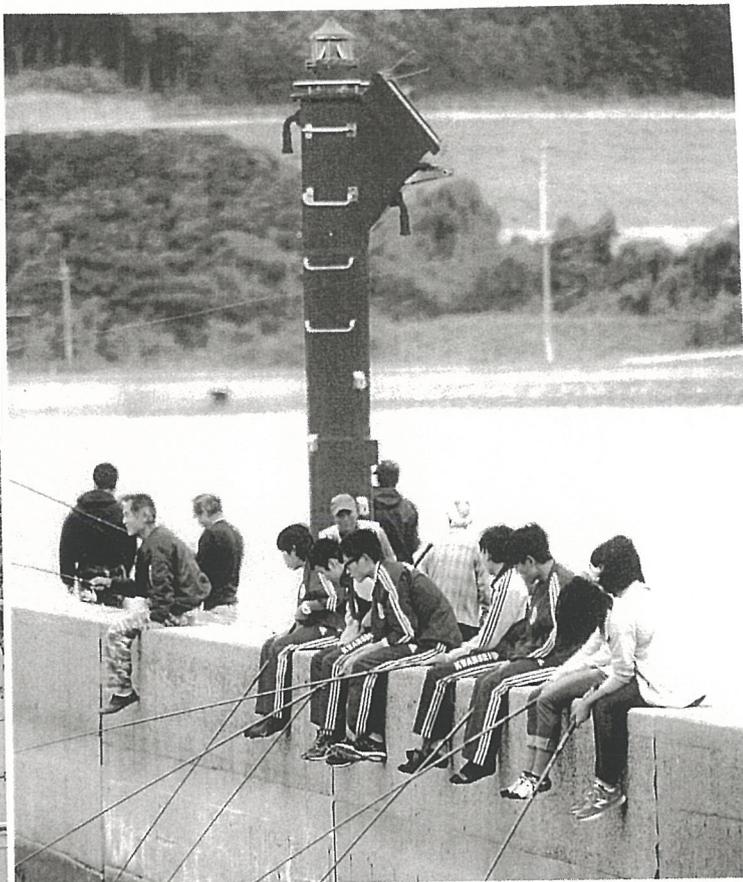


## 2 考察・検証・成果等

①「農漁村民泊受入れ先の確保」「体験プログラムの創作・担い手の確保」は、ともに長崎県松浦市での「一般社団法人まつうら党交流公社」で実施されています。更に安全性の確保については、複数の関係者に相応しいどうかの資質評価をチェックし、13地区組織と1団体を通じて講習会を開くなど理念や安全指導を徹底しているとのこと。

②農村漁村での地域住民との生きがいつくり、収入増、交流人口増加等の活性化となります。子ども達には教室で習うような知識ではなく、人とふれ合って得た一生忘れられない本物の知識を得ることができます。その意味では、宮津を離れも子どもの中でも一生の中でも揺るぎないものであることから、「ふるさとみやづ学」と同じ価値観と考えます。宮津だけでなく関西学院中等部の資料の中でも生徒の作文と校長先生の祝辞にあることから、異なる地域と立場でも価値のあることから、改めて宮津市で農村民泊を進めるべきと考えます。

# 松浦市の「ほんなもん体験」の様子



関西学院大学 > 関西学院中学部 > 2016.3.15 第67回卒業式式辞「卒業生への手紙」

## 2016.3.15 第67回卒業式式辞「卒業生への手紙」

[ 2016年3月15日 更新 ]

2016年3月15日 中学部長 安田栄三

いよいよ 卒業の日を迎えることとなりました。保護者の皆様には、三年間、本当にお世話になり、心から感謝いたしております。このような生徒たちと出会えて、私たちはとても幸せでした。神様に祝福されたこの子たちの未来を、これからも変わらずに励ましていただきますよう、心からお願いいたします。

まだ あどけなさの残る君たちに、入学式で白木少年の話をしてから、3年の月日が流れた。今日という日も、やがて終わってゆく。そのかけがえのない今日という一日のために、用務さんや在校生、そして保護者の方とも一緒になって、少しでも良い一日にしようと、みんなで準備をしてきた。

新入生を迎えた千刈キャンプ、君たちから選ばれた三年生のリーダーは、泥んこになって下級生のために力を尽くしてくれた。このキャンプで、リーダーたちが新入生に伝えたかったことを、一生懸命にまとめて語ってくれた三年生、「頑張っている人を心から応援できる、自分を支えてくれる人のために、誰も見ていないところでも精一杯頑張れる、謙虚で信頼できる友達がいる、自分の考えで行動できる、そんな人になって下さい」この言葉が、後輩の新入生の心に 深く刻まれていった。

前日の雨で 泥んこになったグラウンドを、みんなで整備して始めた体育大会では、白熱した競技や応援合戦、趣向を凝らしたクラブ紹介、ダンス同好会のみんなが引っ張ってくれた女子生徒全員のダンスなど、中学部生らしい姿を見せてくれた。

秋には、「彩(いろどり)」ということばをテーマに、見事な文化祭を展開してくれた。さわやかな歌声と演奏で魅了された音楽コンクールやグリークラブの歌声、各部の展示や舞台はもちろん、観る人を楽しませてくれた演劇コンクール、中庭や体育館での吹奏楽部やダンス同好会のパフォーマンスなど、三年生最後のステージを飾るのにふさわしいものであった。

弁論大会では 弁士はもちろん、弁論の演題を、何日もかけて書いてくれた三年生、また弁士の練習にずっと付き合ってくれた実行委員にも、本当に感謝の気持ちでいっぱいだった。

保健室にいる後輩に、休み時間いつも声をかけに来てくれた先輩、三年生のみんなが中学部に残してくれたさりげない優しさは、下級生にとって大きな宝物となった。

新しい仲間との出会い、たくさんの書物との出会い、ここで培った絆が、どんな時にも目に見えない支えとなる。君たちが懸命に乗り越えてきた壁は、後輩のための確かな礎へと姿を変えた。創立以来126年に渡り、受け継がれてきた中学部の精神、それを表す「感謝・祈り・練達」、三日月の輝きを放ち、人に奉仕できる立派な人間に成長してほしい。





卒業式の定番とも言える 全国の中学生の心をつなげた歌「手紙～拝啓15の君へ」。2番の歌詞には「自分は、どこへ向かうべきか。青春の海は厳しい。でも 人生のすべてに意味がある」15歳という最も多感な時期、胸が張り裂けそうになった瞬間もあっただろう。しかし、その経験があるからこそ、本当に人の痛みのわかる人間になれる。

長崎の修学旅行では、病気の身体に鞭打って、初対面のみんなを心から信じ、原爆の悲しさを話してくださった下平作江さんとの出会いがあった。

「平和の原点は、人の痛みがわかる心をもつこと。皆さんは 何があっても生きる勇気を選んでほしい」話し終えて涙を流されたのは、みんなが真剣に話を聴いてくれたからだと仰っておられた。遺構めぐりを三時間近くも案内して下さった被爆者の方の想いも君たちはしっかり受けとめてくれた。命は、ほかの誰かを幸せにするために使うもの、被爆者の方と話すたびに、僕はそう教えられる。

みんなが松浦でお世話になった民宿の方からも、お手紙をいただいた。「我が家に來られた子供たちは、素直で明るくにぎやかで、人の気持ちを思いやる本当に良い子たちでした。おかげで、家の中が明るくなり、私たち二人、久しぶりに大きな声で笑うことができ、元気になりました。主人は、今度来たときは、野菜をたくさん食べさせんばって言いながら、頑張っています。」

君たちが入学してから、二年間、担任として精一杯、共に生活してくれた早川先生は、「生徒の笑顔のために、そして生徒の未来のために 最善を尽くそうという気持ちでやってきました」「教え子みんなに対して、これからも自分は恥ずかしくない生き方をしたい」そう仰って、新たな道を歩み始められた。大学生のコーチやリーダーはじめ、多くの人に本気で接してもらえた君たちは、本当に幸せだと思う。

五年前に、大きな被害の出た石巻市の大川小学校では、全校児童108人のうち、74人が津波にのみこまれた。君たちと同じ、今は15歳になった少年が、小学校の慰霊碑に手を合わせ「これからは震災の真実をいろんな人に伝えていきたい」そう語っていた。当時、君たちの先輩も現地に駆け付け、泥出しのボランティアをおこなった。作家の浅田次郎さんの作品の中に、こんな文章がある。「力も何もいらぬ。優しさだけがあればいいんだ。大地も空も時間も、全てを覆い尽くすほどの優しささえあれば」

残念ながら、卒業した児童たちが進学した大川中学校は廃校となったが、大川中学校の分まで、みんなは開かれた未来に向かって、しっかり羽ばたいてほしい。

苦しいから、つらいからこそ見える美しい景色が必ずある。君たちの未来に、失敗などない。自分が中学生の頃、右か左か決断に迷うことがあれば、厳しい道を行けと教えられた。中学部を卒業し、君たちには、これからそれぞれの道が待っている。君たちが15年間育ててきた美しい心を、一人一人が、輝く生き方への指針にしてほしい。

「神様は決して、乗り越えられない試練を お与えにはならない」試練の向こう側にこそ今まで見たことのないような希望の光が、きっと輝いている。

出会いがあれば、悲しい別れもある。しかし、どんな舞台に飛び込んでも、君たち一人一人は、必ず誰かに必要とされている。自分が生かされているという想い、そして勇気と希望を持って、たとえどんな小さなことでも、心を込めておこなえる人であってほしいと願う。

君たちのおかげで、僕はこの中学部を、本当に好きになることができた。君たちが卒業してゆく学校だからこそ、僕はこの中学部を誇りに思う。

三年間、誠実に、謙虚に頑張った君たち、本当にありがとう。そして、中学部の卒業、本当におめでとうございます。

 [ごあいさつ  
関連リンク](#)

関西学院大学 > 関西学院中学部 > 2019.3.15 第70回卒業式式辞『誠実を胸に刻み生きる』

## ／ 2019.3.15 第70回卒業式式辞『誠実を胸に刻み生きる』

[ 2019年3月16日 更新 ]

2019年3月15日 中学部長 安田栄三

いよいよ卒業の日を迎えることとなりました。保護者の皆様には、三年間本当にお世話になり、ありがとうございました。素晴らしい生徒たちを預けてくださり、心から感謝いたしております。この子たちのおかげで私たちも、かけがえのない幸せな時間を過ごすことができました。

神様に守られたこの若者たちの未来を、これからも支えていただきますよう、心からお願い申し上げます。

♪ (合唱曲A組 365日の紙飛行機 B組 友～旅立ちの時)

「認め合おう・高め合おう・助け合おう」をスローガンとして出発した生徒会、千刈キャンプでは、1年生がもって仲良くなって自分から話せるようになるにはどうしたらいいか、真剣に話し合っているリーダーたちの姿が印象的であった。まだ見ぬ新入生のために真心をもって準備し、一緒に泥だらけになってくれた3年生の思いは、確実に1年生に伝わっている。

「輝け、若人よ」をテーマに繰り広げられた体育大会、沢山の生徒が実行委員に立候補してくれた。今までになかった応援の仕方は、十分に下級生を楽しませてくれた。入場行進の素晴らしさ、応援旗の絵の美しさや、ダンスのレベルの高さ、その指導にあたってくれた3年生、中には自分が怪我で踊れない辛さを胸にしまい込んで、一生懸命指導の側に回ってくれたダンス部員もいた。

5月のある昼休み、いつものように食堂のテーブルを拭き始めようとする中、3年生の生徒たちがやってきて、みんなでテーブル拭きを始めてくれた。ドラマのような時間だった。その波紋はさらに消えることなく、今も下級生たちが片づけを手伝ってくれている。この1年間も、毎朝登校路のごみ拾いをしてくれた生徒がいた。

中学総体や他の大会でもすべてのクラブが本当に頑張ってくれた。仲間のため、また下級生の指導に尽力してくれた3年生、その陰にはどれほどの苦労があったらうか。また、部活以外で頑張ってくれている生徒たちも沢山いた。見えないところでの努力と、それぞれの活動に心から感動を覚えた。

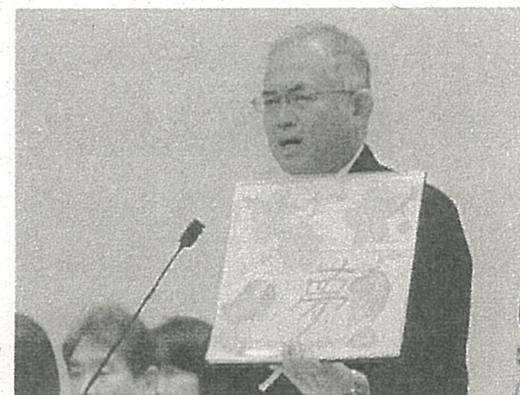
夏のオープンスクールでも沢山の3年生が奉仕してくれた。小学生や保護者に、笑顔と真心を伝えてくれた、その優しく明るい姿に心から感謝したい。笑顔で帰って行った小学生たち、一生懸命に案内してくれた生徒たちの姿が輝いていた。

美しいハーモニーが響き渡った音楽コンクール、文化祭での演劇の誠実な取り組み、演者と裏方が一体となって取り組んだことを、君たち自身が誇りに思っている喜びが伝わってきた。

情熱溢れる弁論大会、また弁論大会の題字を何枚も心を込めて書いてくれた生徒たちもいた。

中学生の歌声や、丁寧な言葉には、人の心を変えていく果てしない大きな力がある。

3年生のみんなが中学部に残してくれた美しい歌声は、下級生にとって大きな宝物となった。



♪ (合唱曲C組 手紙～拝啓十五の君へ D組 結(ゆい))



この春、それぞれの夢に向かって船出をする中学生たち。修学旅行で訪れた長崎でも、親元を離れて高校へ進学する中学生たちがいる。そんな長崎の修学旅行では、病気の身体に鞭打って、初対面のみんなを心から信じ、原爆の悲しさを話して下さった被爆者の方々や、下平作江さんとの出会いがあった。

「平和の原点は、人の痛みがわかる心をもつこと。もっと生きたい、そう願って亡くなったナガサキに眠る人々の想いに寄り添い、皆さんは何があっても生きる勇気を選んでほしい」

「生きて、生きて、生き抜いて。どうか皆さんが生きていて良かったと思える人生にしてほしい・・・」

話の最中に涙を流されたのは、みんなが真剣に話を聴いてくれたからですと仰っておられた。

下平さんは、3年生全員が退場するまで見送ってくださった。何度も手術を繰り返しながら、それでも今、生きていることにご自身が感謝しておられる。人の痛みがわかる心、それは多くの悲しみや苦しみを乗り越えてこそ、初めて自分のものになるような気がする。

家族のごとく接して下さった出水(いずみ)市での民泊、素朴であたたかい民家の方(かた)からも「またぜひ関西学院の生徒さんに来てほしい」そんなお手紙をいただいた。まだ見ぬ君たちのために、心を尽くしてご準備して下さった 地元の方への感謝の気持ちを忘れることはない。

皆から愛されている君たち一人一人が、誰かに必要とされる日は必ず来る。その時まで、しっかり自分を磨いてほ

しい。命は、ほかの誰かを幸せにするために使うもの、僕はそう信じている。

中学部を卒業し、これからはそれぞれの道が待っている。でも何があっても大丈夫、主に用いられることを感謝し、すべてを神様にゆだねて生きてゆけばよい。ここで育てた絆が、どんな時にも目に見えない支えとなる。

「神は真実な方、あなた方を耐えられないような試練に遭わせることはなさらず、試練と共に、逃れる道をも備えてくださる」何度この聖句に励まされてきたことだろうか。

丁寧に生きること、それは試練さえも感謝して受けとること。試練の向こう側にこそ、明るい希望の光がきつと輝いている。

♪ (合唱曲 E組 サザンカ F組 プレゼント)

9月に起きた北海道地震で、一つ下の妹さんを失った17歳の高校生は、こう語っておられる。

「妹の写真がきれいにできて。妹が使っていたブレザーも出てきて。吹奏楽をやっていたんです。きれいな顔でした。本当に頑張ったねって、ずっとそれを強く思っているんで。

楽しかったことはたくさんあったので、これからまたそれを背負って頑張っていこうかなって。

生きて出てきてくれたらもちろんうれしかったけど、顔が見られるっていうだけで本当に自分は幸せなので。」行き場を失った人々に残ったのは、人が人を救い、支え、寄り添う「絆」であった。

24年前、この上ヶ原の大地をも揺るがした大きな地震、こうしてみんなの顔を見ていると、あの時 安否を確認するために走り回って探した生徒たちの姿がよみがえる。電気の灯りを失った西宮の夜空は、いつもより星がきれいに見えた。数か月後に開通した電車の中では、見知らぬ者同士が自然に声を掛け合う姿が見られた。

自然、そして人本来の優しい時間が、あの時、確かに流れていた。

壊滅的だと思ったこの街は、明日を信じ、決して諦めなかった人々の力で復興をもたらす。

神戸にある1・17希望の灯りには、「奪われたすべての命と、生き残った私たちの思いをむすびつなぐ」と記されている。

もっと生きたい、そう願って亡くなられた方々の分まで、私たちはしっかりと生きる使命がある。どうか その決意を、君たちの若い魂にしっかりと刻んでほしい。

♪ (全員合唱 Hail Holy Queen)

人間力の最高峰は、誠実さと優しさ、そして真心、それはすでにみんなの胸の中にある「美しい心」から生まれる。学びを深めるということは、「誠実」を胸に刻むこと。誠実さは必ず希望につながる。

新制中学部になり矢内先生のもと、確かに受け継がれてきた中学部の精神、それを表す「感謝・祈り・練達」この言葉を指針とし、三日月の輝きを放ち、人の痛みがわかる、人に奉仕できる立派な人間に成長してほしい。

君たちが卒業してゆく中学部だからこそ、僕はこの学校を誇りに思う。



## 校外学習で学んだ事

一年D組 三谷 陽夏

私たちは文化祭明けの十一月、奈良県明日香村へ行った。電車を乗り継ぎ、各班ごとに集合にたらそこからは事前に話し合って決めた計画の通りに行動する、というまさに班のチームワークが大事な校外学習だ。

私たちの班は、まず天皇の墓地内にあるといわれている猿石に行くうとしていたが、いきなり方向が分からなくなってしまった。少し慌てたものの、地図を頼りに無事たどり着いた。

その後は鬼の雪隠・組を見て昔の人の技術に驚いたり、聖徳太子生誕の地である橘寺でいろんな伝説について見たり、聞いたりした。特に、人の心の善悪を表すという二面石の見たことのないような顔の形が私は印象的だった。

昼食後、万葉文化館に行った。万葉集などの展示品を見ながら歴史を感じ、不思議な気持ちで見学をした。

いよいよ最後の目的地である高松塚古墳に向けて出発したが、人通りも少なく枝分かれしている道が続き、私たちは焦り始めていた。地図を頼りに進んだものの、今の場所が完全に分からなくなり、とうとう班ごと迷子になってしまった。どうしようかと困っていたところで班の一人が「誰かに聞こう」と言った。偶然近くの畑に農家の方がいて、とても親切に教えて下さった。その言葉に従って歩いていくと時間がかかったが無事到着できた。

この校外学習でいろんな事を学んだが、特に私は「誰かを頼る」こ

とが大切だと感じた。それは決して「他人任せ」という意味ではなく、自分にできない事はその場に依りて助けてくれる人に頼るべきだ、という意味である。農家の人も、迷子の解決やいろんな知恵を出し合った友達がいだからこそ学ぶことがあったのだと思う。

私は普段から人に頼る。だからこそ今度は「誰かに頼られる」存在になろうと思えた。



## 修学旅行

### 修学旅行について

三年C組 川島 大知

私は二〇一五年十一月、三年生の修学旅行で修学旅行委員を務めさせてもらいました。一学期の末、クラスのホームルームで委員決めをしました。しかし、その時は誰も自ら手を挙げず結局じゃんけんで決めることになり、負けた僕は半強制的修学旅行委員になりました。でも、内心一度は委員をやってみたくった(一、二年次はしたことがなかった)ので、やるからには全力を出そうという思いでした。その後、初めて委員でのミーティングが開かれ、旅行二日目の夜の一時半を何に使うのか何度も議論しました。議論の結果、そのレクリエーションの時間を大きく二つに分け、一つはクイズ大会、もう一つは特技披露となりました。私はクイズ大会を執り仕切ることにになり、初めてその六人でミーティングが開かれました。

全く何もない所からクイズを作るのは大変でした。問題の条件はみんなが楽しめること、怪我をしないこと、そして四十五分に収まることでした。最初は行き詰まっていた企画会議でしたが、先生や友達に助けをもらい、順調に進んでいきました。また特技披露の班も沢山の壁を乗り越えて着々と準備が整いました。やっとの思いでできたレク

リエーション大会の原稿が出来上がった時はとても感動しました。何回かの学校でのリハーサルを経て遂に、修学旅行がやってきました。

修学旅行委員の仕事はレクリエーション大会の企画、設営の他にも生徒の誘導などいろいろありましたが、どの仕事もとても楽しくできました。大会は二日目の夜にあるので一日目の夜には綿密なりハーサルが行われました。委員全員が熱心に向き合って、レクリエーション大会を良いものにしていました。

そして二日目の夜、ついに、待ちに待った本番がやってきました。元々私は緊張しいだったのでよく覚えていませんが、登壇中はかなりハイテンションで場を盛り上げていたのだと思います。とにかく学年全員が楽しんでいたのは確かだと思いました。大会の後いろいろな友達、先生から、さっきの良かったねと声をかけられました。その後の特技披露は先生もサプライズに加わり大盛況でした。

何か自分で言うのも厚かましいと思いますが、みんなが盛り上がったのは、少しは自分のお蔭でもあるのかなと思います。この修学旅行は地味な自分に社会性と素直さを持たせてくれたのかなと思います。

### 修学旅行

三年E組 原井 里奈

今回の修学旅行では、福岡・長崎へ行った。九州に行くのは初めてで楽しみだったし、実際、「あつ」という間に終わってしまった。また修学旅行委員として一足先に関わることができて嬉しかった。四泊五日の旅の中で私は、楽しいことや辛いことをたくさん学んだ。ここ

で学んだことは、私の中でこれから先、一生生き続けていく。しかし、私の中で一番思い出深かったのはやはり後半戦である。

私たちの学年は関学初の試みとなる民泊体験をした。私を泊めて下さったのは公民館にとっても近い家に住んでいる松本さんだった。自己紹介をする時に、コーヒーゼリーを初めていただいた。すごくおいしくて、

「作り方教えてくださいー！」  
というところ、

「ごめんね。粉いれて固めただけなんよ。」

と言われ、びっくりした。とてもフレンドリーに接してもらったこともあり、とても居心地がよかった。寝る時は、四人で布団を並べてわいわいしていて、次の日起きれないんじゃないかというぐらい夜更かししていたと思う。

次の日の朝、友達に布団をひっくり返されて目覚めた。椅子の足にぶつかって普通に痛かった。朝食の豪華さに私は「何時に起きたんだろう」と思ってしまった。とても家庭的でおいしかった。

民泊の体験プログラムの中には、ほんなもん体験というものがある。私は、そば打ちと和太鼓を体験した。和太鼓の体験なのになぜかどろろが一人人気だった。不思議だ。

ほんなもん体験は内容が違っても学年全員が行った。しかし私たち四人しか体験していないことがある。みなさんは、うべを知っているだろうか。知らないだろう。(知ってたらごめんさい)握りこぶし大の太きさで紫色の皮を纏い、中身は百粒ほどの種を透明な黄緑色の何かがこびりついている、いわゆる気持ち悪い見た目のだ。しかし、私はこいつを少し口にしたとき、「裏切られた」と思った。見た目とは真逆で上品な甘さだった。どうやらこいつは、全国のスーパー

では出回っていない代物らしく、民泊ではこんな体験もできるのだ。是非、これからも修学旅行で行う学年を作ってほしいと思う。  
こんな私の修学旅行後半戦だったが、充実してほしかった。どの場面を切り取っても良いものばかりだった。前半戦も含め、今回の修学旅行は私のおかげがえのない思い出の一つとなった。

## 修学旅行

三年F組 品川 慧洸

僕は、この修学旅行でたくさん驚くことがあった。今からその驚くことについて書こうと思う。

一つ目は、泊まったホテルのホコリの多さだ。こんなことを書いてはホテルの人には失礼だが、部屋ではホコリがすごく多かった。どのくらい多かったかというと、空中に舞っているホコリが普通に目視でき、次の日ホコリで喉が痛くなるくらい多かった。

二つ目は、遺構めぐりである。遺構めぐりでは同じ班の中でちょっと心配な男子が数人いたのだが、それはまったくの杞憂で班全員が静かに案内者の方のお話を聞いていた。後で付き添ってくださった宮川先生に褒められるほどだった。

三つ目は、班別自主研修だ。班別自主研修での移動時間が予想していたものよりだいぶ短く、また昼食の時間も一時間ぐらい短縮できたので時間が二時間ぐらいいまわってしまったことに驚いていた。

四つ目は、民泊についてである。僕は修学旅行に行く前まで民泊がすごくいやだった。しかし、実際に民泊をしてみると、とても楽し

かった。普段では出来ないような体験も出来て、修学旅行で一番楽しく密度の濃い時間だったと思う。

最後に、僕は九州に行くこと自体が初めてだったので、修学旅行では見るものすべてが新鮮だったし、楽しかった。だが、やはり修学旅行で一番楽しかったのは、友達と過ごした時間である。この思い出は生涯忘れることはないだろう。こんな思い出をくれたみんなに感謝する。ありがとう。



## 総合優勝

三年F組 土橋 由大

三年生にとっては最後の球技大会。球技大会といえば毎年、震えあがるような寒さのなかおこなわれていましたが、今年は奇跡的な暖冬で、天候にも恵まれたために例年よりかは楽しく球技大会をおこなうことができました。

僕は野球部だったのでソフトボールに出場しました。F組は野球部が三人で他のメンバーもいつもボカーンとしている人が多かったので「せめて一勝はしようぜ」というだけだった感じでした。しかし、いざ初日のE組との試合が始まるとみんながバンバン打ちだして勝つことができました。この試合で僕らは「いけるんちゃう」と思うようになります。チームが団結していくようになりました。

二日目はA組とでした。A組は優勝候補で僕らも負けるだろうと思っていましたが、昨日からの勢いがあつたのか勝つことができました。強いチームに勝つことにみんな驚いていました。まさかの優勝が見えてきました。

三日目は最後のC組でした。初日にはだらけていたみんながその日は「絶対に勝つぞー」という強い意気込みが感じられました。そのた